

松原市文化財報告 第16冊

立部遺跡

松原市柴垣2丁目地内における
宅地造成工事に伴う立部遺跡 F7-1-37 発掘調査報告書

令和5(2023)年12月

松原市教育委員会

例 言

1. 本書は、松原市教育委員会が事業者である株式会社アール・イー・エムより依頼を受け、令和4年度(2022)に実施した立部遺跡の発掘調査報告書である。松原市教育委員会における調査地区番号の呼称は、F7-1-37である。
2. 本調査は、宅地造成工事に伴って実施した。なお、発掘調査・整理作業にかかる費用は事業者が負担した。
3. 発掘調査・整理作業ならびに本書の執筆・編集は、櫻木規秀が担当した。
4. 本書で用いた平面座標値は、全て世界測地系(2011成果)による平面直角座標系第VI系の数値で、m単位で表記した。また、方位は座標北を使用した。なお、水準は東京湾平均海面高(T.P.)を基準とした(例H=10.00m)。
5. 発掘した遺構は、検出順にアラビア数字で通し番号を付し、その後ろに遺構の種類を文字で示して、遺構台帳を作成した(例S001土坑)。本書では、紙幅の都合上「S」記号、2～3桁目の「0」を省略した(例1土坑)。なお、複数の柱穴から構成される掘立柱建物は、遺構の種類の後ろに別途通し番号を付した(例掘立柱建物1)。
6. 地層の土色は、小山正忠・竹原秀雄編「新 標準土色帖 2016年版」(農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)を用いて目視により比定した。
7. 各図面は適宜縮尺を変えており、図ごとにスケールバーを掲載し、キャプションに縮尺を表示した。
8. 出土遺物実測図の縮尺は1/4・1/6とした。なお、出土遺物写真の縮尺は任意である。
9. 遺構写真の撮影は櫻木が行い、出土遺物写真の撮影は株式会社アートが行った。
10. 調査の実施にあたり、事業者及び関係者の皆様にご協力を得た。記して謝意を表したい。
11. 表紙画像は国土地理院が作成した「基盤地図情報数値標高モデル(5mメッシュ)」のデータをもとにQGISで作成した。
12. 発掘調査の掘削・測量、遺構図・出土遺物の整理作業は株式会社アートが実施した。
13. 本書の作成にあたり、下記の報告書等を参考にした。
(財)大阪府文化財調査研究センター 1998 『観音寺遺跡』
佐藤隆 1992 『平安時代における長原遺跡の動向』『長原遺跡発掘調査報告』V (財)大阪市文化財協会
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
14. 調査に関わる出土遺物・図面・写真等の記録類は松原市教育委員会が保管している。

目 次

1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 位置と環境ならびに既往の調査	1
3. 基本層序	1
4. 発掘調査結果	2
5. 総括	8

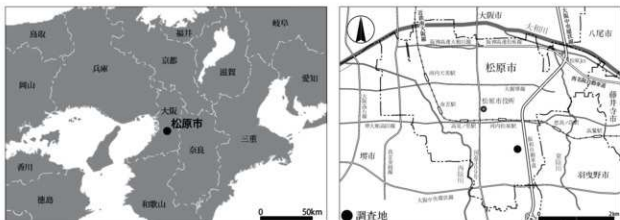


図1 発掘調査位置図

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、事業者である株式会社アール・イー・エムにより、松原市柴塚2丁目517番1において宅地造成工事が計画されたことによる。確認調査を実施したところ、一部において古代～中世の遺構・遺物が認められた。

松原市教育委員会は事業者と確認された埋蔵文化財について協議を行い、150mの記録保存調査を実施することとなった。調査は令和4年(2022)10月6日より着手し、重機掘削・遺構検出・遺構掘削・写真撮影・実測作業・遺物取り上げ作業を行い、令和4年11月8日付けで、現地調査を終了した。引き続き整理作業を開始し、令和5年(2023)12月28日付けで本報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

なお、本調査では、平面図は光波測距儀を用いて電子平板で作成し、断面図は手描きで作成した。また、写真撮影は、Canon社製のフルサイズの一眼レフカメラ(EOS 6D)を使用し、RAW・TIFF・JPEG形式でデータを保存している。

2. 位置と環境ならびに既往の調査

松原市は大阪府のほぼ中央に位置する面積16.6 km²人口116,703人(令和5年10月時点)の都市である。

市域の東側には羽曳野丘陵からのびる瓜破台地、西側には陶器山丘陵からのびる泉北台地があり、その間には沖積地が広がる。市域の北を西流するのは宝永元年(1704)に付け替えられた大和川で、瓜破台地の東裾を東除川、泉北台地の東裾を西除川が北流する。

立部遺跡は縄文～終世の集落跡・社寺跡などで、松原市立部1～5丁目、柴塚2丁目ほかに所在する。日下雅義氏の地形分類図(『松原市史』第1巻所収)では中位段丘上に位置する。調査地の標高は概ね31mである。小字名は北ノ方、北出口である。

立部遺跡では、旧石器～弥生時代における人々の活動の痕跡は低調である。古墳時代になると、中期～後期に立部古墳群が営まれ、後期には立部遺跡の北東に河内大塚山古墳(大塚墓参考地)が築造される。

律令制下では、調査地周辺は河内国丹比郡土師郷に属するようだが、土師郷は堺市に比定する説があり、確定ではない。丹比郡は11世紀後半までに3郡に分割される。調査地は丹比郡に属し、付近の荘園には西に広隆寺領松原荘、北東に皇室領の会賀牧(荘)があるが、文献史料がなく土地支配の状況は不明である。

平安時代後期～室町時代前期にかけては、遺跡北部の複数地点で集落が形成されている。また、遺跡南部では平安時代後期～鎌倉時代の铸造に関わるとみられる粘土採掘土坑群が確認されている(F8-3-5)。

室町時代中期以降、人々の活動の痕跡はみえなくなる。江戸時代には、調査地周辺は河内国丹比郡立部村にあたり、幕末は館林藩秋元家の領地であった。

なお、既往の調査としては、南側で昭和61・62年度(1986・1987)に実施した本発掘調査F7-3-16・21(未報告)がある。調査では、掘立柱建物や井戸、土師器皿の一括廃棄が確認され、平安時代後期～鎌倉時代を中心とする集落跡であることがわかった。

また、東側で阪和自動車道・府道建設に伴う本発掘調査がある((財)大阪府文化財調査研究センター1998)。この調査では、奈良時代の掘立柱建物や平安時代前期の溝で囲まれた在地有力者の屋敷のほか、平安時代末期の大溝に囲まれた在地有力者の屋敷や12世紀中頃～14世紀前半頃にかけての、掘立柱建物や井戸から構成される集落が見つかっている。

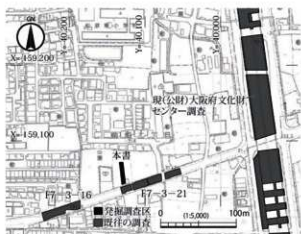


図2 調査区、既往の主要調査地位置図 1:5,000

3. 基本層序

基本層序は、上から耕土、床土、地山である黄褐色シルト質粘土である。なお、調査区南東隅では、地山が明青灰色に変色している。



a 10YR8/8黄褐色シルト質粘土(地山)

図3 基本土層柱状図 1:20

4. 発掘調査結果

(1) 調査の概要

本調査で検出した遺構は、掘立柱建物2棟、土坑13基、溝2条、柱穴である。出土遺物量は4箱で、土師器・須恵器・黒色土器・瓦・石製品・羽口等が出土した。以下、遺構の種別ごとに述べる。

(2) 検出遺構・出土遺物

掘立柱建物1・14溝 (図5・12) 調査区中央部で検出した4間×2間以上の掘立柱建物である。東側は調査区外に所在するが、南北棟とみられる。柱穴の平面形状は円形を基本とする。ただ、7・9柱穴のように柱抜き取りに起因し、形状が円形ではないものもある。柱穴の直径は概ね0.25~0.35mが多い。柱穴の深さは0.16~0.5mだが、0.4m前後が多い。柱間寸法は桁行が2.0m、梁行が1.7~1.74mである。建物の方位は西に3°ある。

建物南部の屋内には柱穴がない場所があり、土間と考えられる。柱穴の切り合いから少なくとも1回は建替えられている。

14溝は調査区中央部でコの字に検出した溝である。検出長約18.4m、幅0.15~2.15m、深さ0.04~0.14mをはかる。西辺は浅いが、南北辺の東側になるほど幅が広くなり、若干深くなる。方位が近似しているため、掘立柱建物1の区画溝と考えられ、雨落ち溝としての機能も想定される。後述する掘立柱建物2の機能時には、建物の中を通るため、すでに14溝は埋没していたと考えられる。

1は土師器皿である。口縁部直下を強めにナデる。10世紀後半~11世紀中頃であろうか。2は黒色土器A類の椀で、幅広の高台をもつ。3は粗製の土師器椀である。2~3は9世紀後半~10世紀前半と思われる。なお、14溝の出土遺物には、土師器、須恵器があるが、細片のため図化できなかった。

点数が少なく、細片であるため建物の時期比定は難しいが、9世紀後半~11世紀中頃までにはおさまる。**掘立柱建物2** (図6・12) 調査区中央部で検出した2間×2間の総柱建物である。調査区東側に向かってさらに建物が続く可能性もあるが、現時点では不明である。柱穴の平面形状は円形である。柱穴の直径は0.22~0.3mで、深さは0.22~0.38mである。柱間寸法は2.0~2.1mである。建物の方位は西に4°ある。柱穴の切り合いから、掘立柱建物1より後出する。

4は黒色土器A類の小皿で、内湾する体部をもつ。

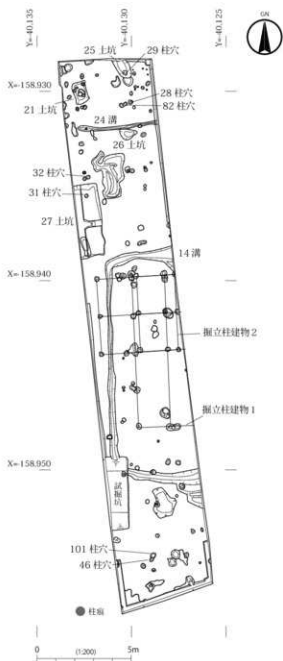


図4 遺構平面図 1:200

10世紀後半~11世紀中頃と思われる。

28・82柱穴 (図6・12) 調査区北部で検出した。28柱穴は直径約0.24m、深さ0.49mである。第4層の上部で石材を検出した。位置的に礎板の可能性が考えられるが、その場合は柱抜き取り時に傾いたとみられる。82柱穴は28柱穴の西隣に所在し、直径約0.2m、深さ0.25mをはかる。

28柱穴の出土遺物は土師質の輪の羽口5、土師器皿6~7である。5は表面に鍛冶滓が付着する。土師器皿は、6~7とも口縁部直下を強めにナデて、端部を外方向に引き出す。形態は類似するが、大小の法量差がある。時期は10世紀末~11世紀中頃であろうか。

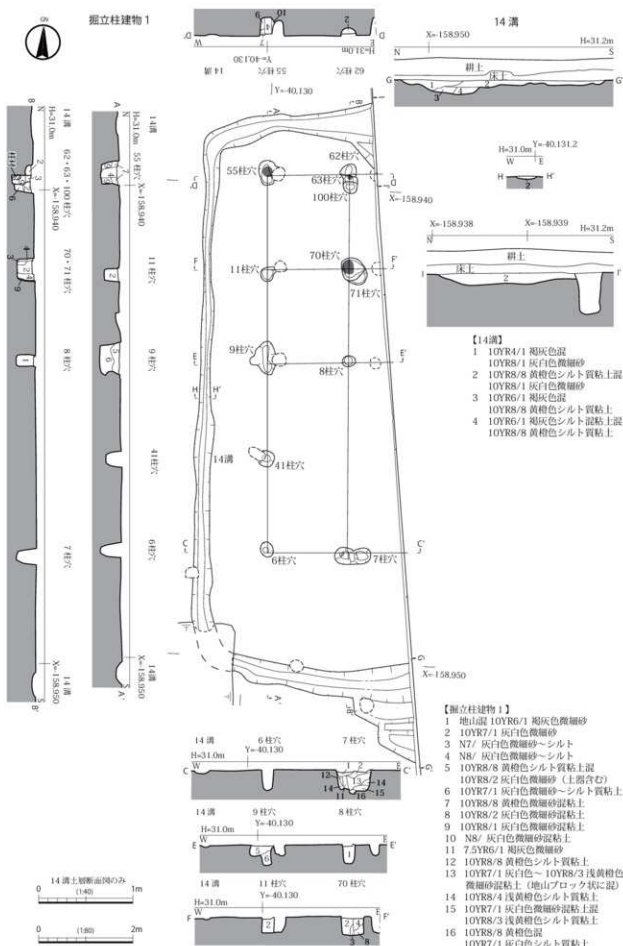


図5 独立柱建物1・14溝 平面・断面図 1:80・40

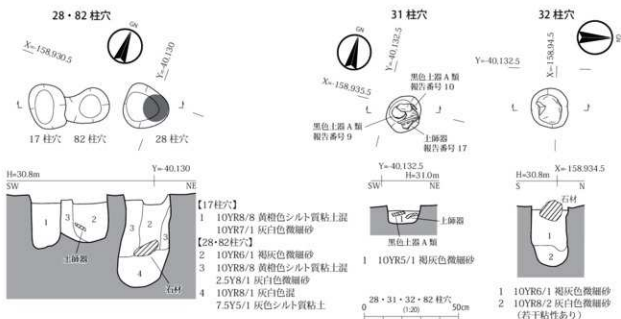
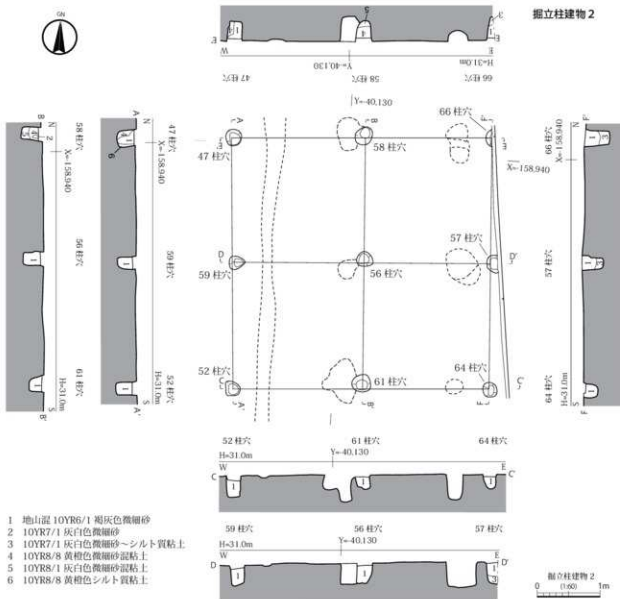
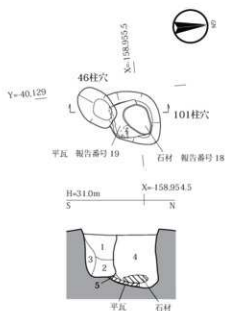


図6 掘立柱建物2、28・31・32・82 柱穴 平面・断面図 1 : 60・20



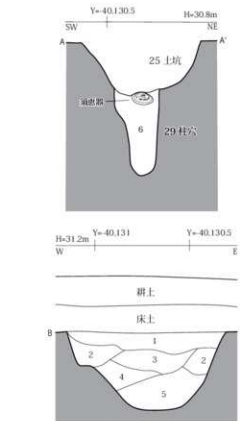
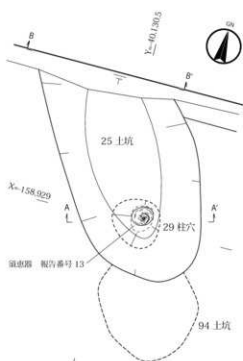
- 【46柱穴】
 1 10YR8/1 灰白色微細砂
 2 10YR6/1 黄灰色微細砂 (若干粘性あり、
 下層に 5 若干含む)
 3 N7/ 灰白色シルト質粘土
 【101柱穴】
 4 10YR7/1 灰白色微細砂 (地山ブロック状に混)
 5 N7/ 灰白色シルト質粘土

図7 46・101 柱穴 平面・断面図 1 : 20



- 【73柱穴】
 1 10YR8/8 黄褐色微細砂～シルト混
 10YR8/1 灰白色微細砂
 【23柱穴】
 2 10YR7/1 灰白色微細砂
 【21土坑】
 3 10YR7/1 灰白色微細砂混
 10YR8/8 黄褐色シルト
 4 10YR8/8 黄褐色微細砂 (地山ブロック状に混、
 10YR7/1 灰白色微細砂若干含む)
 5 10YR8/2 灰白色シルト質粘土

図8 21 土坑 平面・断面図 1 : 40



- 【25土坑】
 1 7.5Y7/1 明褐色微細砂 (10YR8/8 黄褐色微細砂若干含む)
 2 2.5Y8/2 灰白色微細砂
 3 10YR7/1 灰白色微細砂～シルト
 4 10YR8/1 灰白色微細砂～シルト (若干粘性あり)
 5 7.5Y8/1 灰白色微細砂～シルト (若干粘性あり)
 【29柱穴】
 6 N7/ 灰白色シルト質粘土

図9 25 土坑・29 柱穴 遺物出土状況・断面図 1 : 20

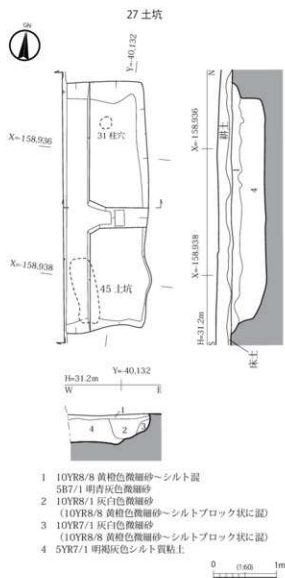
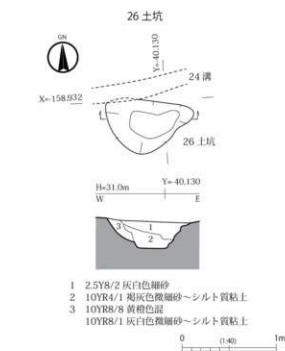


図10 26・27土坑 平面・断面図 1:40・60

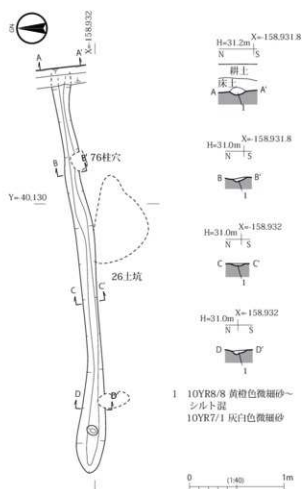


図11 24溝 平面・断面図 1:40

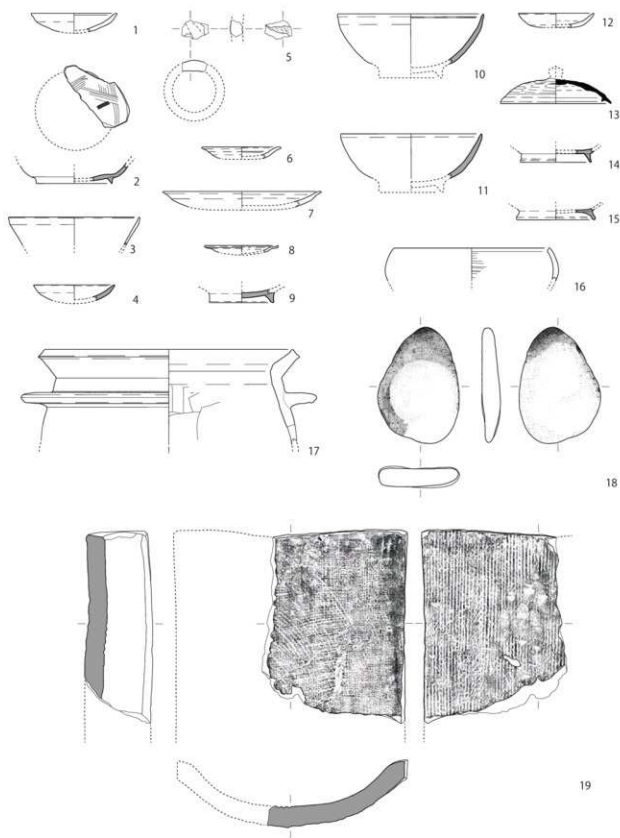
82柱穴の出土遺物は土師器皿12である。口縁部は外方向に向かって立ち上がる。時期は10世紀末～11世紀中頃であろうか。

31柱穴(図6・12) 調査区北部で検出した。直径0.18m、深さ0.1mをはかる。27土坑の埋没後に形成されている。内部からは土師器皿8、黒色土器A類の椀9～10、土師器羽釜17の破片が重なって出土した。意図は不明だが、埋納された可能性がある。

8はての字状口縁をもつ京都系の土師器皿で、10世紀後半～11世紀前半に比定できる。黒色土器A類の椀9は貼り付け高台が付された底部である。10は椀の口縁部～体部で、口縁部の下がやや強めにナデられている。9～10は10世紀末～11世紀中頃であろうか。17の土師器羽釜はくの字状の口縁部をもち、水平に鈎がつく。10世紀後半～11世紀代とみられる。

32柱穴(図6・12) 調査区北部で検出した。直径約0.2m、深さ0.32mである。最上部に石材がみられたが、建物に関わるものではなく、廃棄されたものと考えられる。

出土遺物は黒色土器A類の椀11で、口縁部～体部の



1～2：掘立柱建物1 9柱穴第5層、3：掘立柱建物1 11柱穴第2層最上層、4：掘立柱建物2 58柱穴第4層、
 5～6：28柱穴第2層、7：28柱穴第3層、8～10・17：31柱穴、11：32柱穴第1層、12：82柱穴段下げ時最上層、
 13：25土坑・29柱穴、14～16：27土坑第1層、18～19：101柱穴第4・5層最下層



図 12 出土遺物実測図

破片である。10世紀末～11世紀中頃に比定される。

46・101柱穴 (図7・12) 調査区南部で検出した柱穴である。46柱穴が101柱穴を切る。46柱穴は直径約0.2m、深さ0.25m、101柱穴は直径約0.3m、深さ0.31mである。101柱穴は、礎板として扁平な石材18と平瓦19を設置していた。平瓦は凹面に布目と糸切り痕、凸面に叩き目と指頭圧痕がみられる。側面と凹面側端部はケズリとナデで整形されている。詳細な時期は不明だが、奈良～平安時代と考えられる。

21土坑 (図8) 調査区北西部で検出した隅丸長方形の土坑で、長軸1.15m、短軸0.74m、深さ0.41mをはかる。複数の柱穴と切り合うが、本土坑が最も古い。

土師器と黒色土器の破片が出土しているが、細片のため図化できるものはなかった。

25土坑・29柱穴 (図9・12) 調査区北部で検出した土坑である。細長い楕円形を呈し、北に向かって調査区外にのびる。検出長1.08m、幅0.71m、深さ0.41mをはかる。検出直径約0.25m、確認深度0.46mの29柱穴と切り合うが、本土坑掘削中に29柱穴を確認したため、前後関係は不明である。

25土坑の底部、29柱穴の確認面上部にあたる位置から、7世紀中頃の須恵器杯Gの蓋13が出土した。つまみを欠損するがほぼ完形である。前述のとおり、前後関係が不明であるため、帰属する遺構も不明である。

26土坑 (図10) 調査区北部で検出した隅丸三角形を呈する土坑である。長軸0.93m、短軸0.57m、深さ0.29mをはかる。24溝に切られる。

なお、遺物は出土しなかった。

27土坑 (図10・12) 調査区北西部で検出した長方形の土坑である。西側は調査区外にのびる。長軸3.95m、短軸1.4m、深さ0.55mをはかる。重複する31柱穴、45土坑より古い。

第1層で遺物が出土したが、第2層以下では出土遺物は認められなかった。14は黒色土器A類、15は黒色土器B類の椀底部である。両方ともハの字状の貼り付け高台をもつ。14～15は10世紀末～11世紀中頃に比定される。16は土師器鉢で、口縁部に向かって内溝する。9～10世紀代であろうか。

24溝 (図11) 調査区北部で検出した東西方向の溝である。東側は調査区外にのびる。検出長4.24m、幅0.12～0.3m、深さ0.03～0.08mをはかる。26土坑を切り、76柱穴などに切られる。西端で柱穴を確認したが、前後関係は明らかにできなかった。

当遺構からは土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

5. 総括

最後に、時代別に調査結果をまとめ、総括とする。
飛鳥時代 (7世紀) 須恵器杯Gの蓋が出土した25土坑または29柱穴を確認したのみである。近隣の調査でも当時代の遺構・遺物は確認されていないが、今後の調査では、遺構が存在する可能性に留意したい。

平安時代 (9世紀後半～11世紀中頃) 本調査で中心となる時期で、掘立柱建物1、14溝、掘立柱建物2などが帰属する。井戸は未検出だが、建物の周辺に土坑、溝、柱穴が存在する。遺構・遺物の内容からみて、本調査地は一般的な集落といえる。

集落の中心は区画溝をもつ掘立柱建物1で、少なくとも1回建替えられ、廃絶する。この後詳細な時期は不明だが、ほぼ同位置で掘立柱建物2が建てられる。

遺構の時期については、出土遺物に破片が多く、絞りこめていないため、時期幅は広くみている。ただ、10世紀後半～11世紀中頃の遺物が割合的に多いため、集落の主体はこの時期と考えている。

本調査地の南側の調査(F7-3-16・21)では、11世紀末～13世紀前半を中心とする集落が見つかっており、同一の集落が継続するとみられる。集落の中心は、9世紀後半～11世紀中頃は本調査地付近にあり、11世紀末頃以降は南側に移ると考えられる(図13)。

なお、本調査地の東側の調査(財)大阪府文化財調査研究センター1998)では、10世紀代～12世紀前半頃の遺構・遺物は稀薄だが、B地区で12世紀後半～末の大溝をもつ在地有力者の屋敷、D地区北部で住居と倉庫とみられる掘立柱建物からなる屋敷や井戸などで構成される集落が確認されている。これらの屋敷・集落とF7-3-16・21の集落は並行する時期があり、有機的な関係にあったと考えられる。

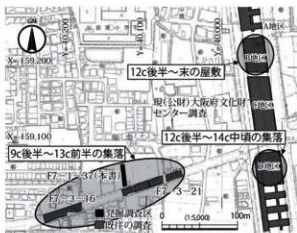


図13 調査地周辺における集落等の動向 1 : 5,000



図 14 調査区全景（北西から）



図 15 掘立柱建物 1・2 全景（西から）

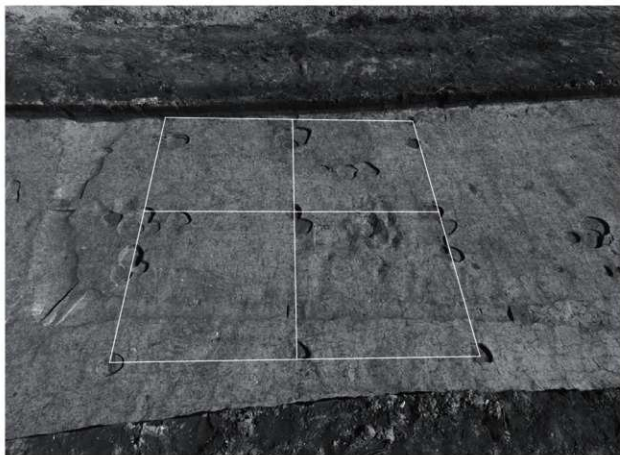


図16 振立柱建物2全景 (西から)



図17 14溝 G-G' 断面 (西から)



図19 17・28・82 柱穴断面 (南から)



図18 14溝 I-I' 断面 (西から)



図20 31 柱穴遺物出土状況 (南から)



図21 32柱穴断面(東から)



図25 26土坑断面(南から)



図22 46・101柱穴断面(東から)



図26 27土坑南北断面(北東から)



図23 101柱穴礎板検出状況(西から)



図27 27土坑東西断面(南から)



図24 21土坑断面(南から)



図28 25土坑断面(南から)



図29 25土坑全景（南東から）



図31 24溝A-A'断面（西から）



図32 24溝B-B'断面（西から）



図30 25土坑・29柱穴遺物出土状況（北から）



図33 25土坑・29柱穴出土須恵器杯蓋

13

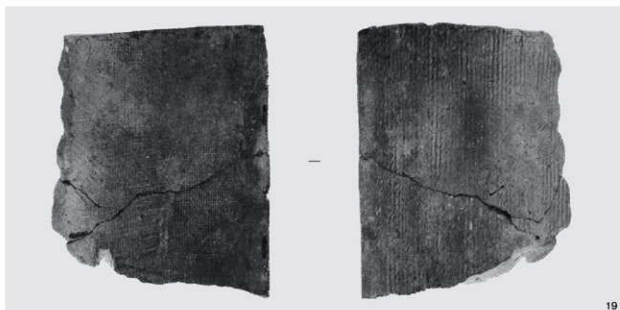


図34 101柱穴出土平瓦

19

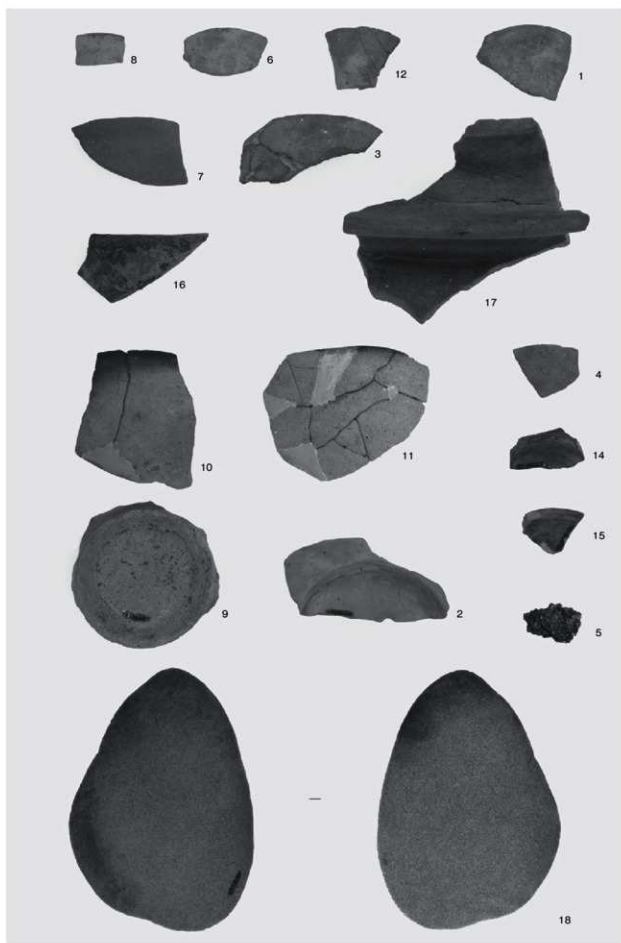


図 35 各遺構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たつべいせき							
書名	立部遺跡							
副書名1	松原市柴垣2丁目地内における宅地造成工事に伴う立部遺跡F7-1-37発掘調査報告書							
シリーズ名	松原市文化財報告							
シリーズ番号	第16冊							
編著者名	榎木 規秀							
編集機関	松原市教育委員会							
所在地	〒580-8501 大阪府松原市阿保1-1-1 TEL 072-334-1550 (代表)							
発行年月日	令和5年(2023)12月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たつべいせき 立部遺跡	大阪府 松原市柴垣2丁目	27217	39	34° 33' 59"	135° 33' 46"	20221006 ～ 20221108	150㎡	宅地造成に伴う記録保存調査
収録遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
立部遺跡	集落	平安時代	掘立柱建物2、土坑13、溝2、柱穴		土師器、須恵器、黒色土器、瓦、羽口、石製品		平安時代の区画溝をもつ掘立柱建物を確認。	
要約	本調査では9世紀後半～11世紀中頃と考えられる掘立柱建物、土坑、溝などの集落に関わる遺構を確認した。掘立柱建物は区画溝をもつもので、集落内の中心となる建物と考えられる。本調査地の南側の発掘調査では、11世紀末～13世紀前半を中心とする集落が検出されているが、さらに古い時期の集落が本調査地付近に所在することを確認した。							

松原市文化財報告 第16冊

立部遺跡

松原市柴垣2丁目地内における宅地造成工事に伴う立部遺跡F7-1-37発掘調査報告書

発行年月日 令和5年(2023)12月28日

編集・発行 松原市教育委員会
〒580-8501 大阪府松原市阿保1丁目1番1号
電話 072-334-1550 (代表)

印刷・製本 能登印刷株式会社
〒920-0855 石川県金沢市武蔵町7番10号